

good loser（よき敗者）

2014年ソチ冬季オリンピック競技会でアスリートたちの躍動や激闘に感動し、元気と勇気が与えられました。アスリートの皆さんの努力を筆頭に支えたスタッフの方々、そして国を挙げての多くの応援者の励ましの賜でしょう。華やかな報道の陰に必死の努力が実を結ばなかったアスリートたちの姿があることも忘れてはならないと思います。ご苦労様でした。大きなプレッシャーのもと努力を積み重ねられたことに敬意を表わさねばならないと思います。

フリースタイルスキー女子モーグルで、1998年長野オリンピック7位、2002年ソルトレイクシティオリンピック6位、2006年トリノオリンピック5位、2010年バンクーバーオリンピック4位と階段を登るも遂に3位メダルへ届かなかった上村愛子選手の「五輪は最高の場所」とすがすがしく笑った顔を見て考えました。

名横綱双葉山は70連勝の記録が断たれた時に「われ未だ木鶏たりえず」と心情を吐露しました。彼の人間性が滲み出ています。ラグビーでは“good loser”であることが reasonable manner として伝統的に重んじられてきました。自己を厳しく律し友情を重んじる事が誇りとして実行されてきました。ゲームに負けて楽しい筈がありません。そこで good loser であろうとあらかじめ考えておくことがラグビーを楽しむために大切であると自覚し意識するように努める事が求められました。しかし good loser という言葉は最近全くと言ってよい程聞かれなくなりました。ゲームをすればどちらか一方のチームが負けるのです。確立 1/2 ですから負け方と負けた後の事はチームとしてもプレーヤー個人として全く無視出来る事ではありません。

good loser あることの中味即ち必須要件には2つあります。1つ目は極力健闘善戦することによって、“will to win”が欠乏してはいけないということです。双方のチームが話し合いの上で行う match でトライ数の差が10以上のゲームは miss match と言われるのです。そうなることは相手に失礼で miss match では good loser はあり得ないのです。健闘善戦は no side を望ましいものにするのに必要条件です。ただしトーナメントでは組み合わせにより仕方なく miss game が発生することがあります。あってはならないことですが次のゲームや後の組み合わせのことを考えて故意にゲームに負けるという悪知恵を働かせる人もいますが bad loser 以外の何者でもありません。match はお互いに力を認め合い平素の鍛錬の成果を試し合うもので、競り合いの上双方に満足感が残ることが大切です。満足感の要件としてゲーム全体を振り返った場合、ゲーム始めの 1/4 の時間帯だけは対等に戦ったが後はズルズルと大差がつくというのは全力を出し切って頑張ったという気持ちになりません。ゲーム全体の時間の 1/4 から 3/4 ぐらい（前半当初から後半 20 分ぐらい）まで時間帯を対等とし、3/4（後半 10 分ぐらい）から終りにかけて勝負を決めるという意識が重要で、そのための体力と気力を平素から養っておかなければなりません。自己の実力を正確に知らずにただ「一生懸命全力で」とか「始めが大事」という考えだけが強過ぎる結果、線香花火のようにパチパチと燃え、すうーと消える流れになってしまうことは自分が面白くないだけでなく、相手にとっても失礼なことで善戦とは言えません。以前指導者仲間の話の中で「真珠湾攻撃だけでは戦争に勝てん」という例え話をしたことがありました。国力を比較しないで無謀な戦争に走った軍人たちを非難すると同時に駆り出された国民の哀れが話題になりました。必死でやればなんでもよいというものではありません。ゲーム時間 80 分（40 分ハーフのゲーム）というのは瞬間に勝負が決まる競技に比べ「長時間制」の競技で陸上競技でいえばマラソンにあたります。ラグビーは相手と戦うのだからタイムレースとは異なり全体的に見て分析してみると参考になることが浮かび上がってきます。最高に集中し最高の力をゲームの始めから終りまで発揮し続けるというのは気持ちとしては持っても生き物である人間には不可能です。無理が通れば道理が引っ込むというものではありません。息切れした時、気持ちが途切れた時が怖いのです。身体が慣れるように無理のないオープンプレーやロングキックの応酬をしながら機をうかがいながらゲーム全体の力の配分をするということは reasonable なことでラグビーの伝統的な楽しみ方です。

「30キロ過ぎで一番速く走るマラソン」の著者小出義雄は『マラソンには実力に関係なしに自己ベストを更新するためのコツがある。キーワードは「後半型」の走り』と面白いことを言っています。‘平均型’、‘先行型’、‘後半型’の3つを並べ‘基本タイムを知り基本タイムに対しゆっくり’と力を加減することを説いています。平素の努力を生かすためにも本当にラグビーを楽しむためにも、一般的になっているギャンブル型からフレキシブルに考え直す必要があると思います。

2つ目はマナーに関わるものです。双方のチームが相互にラグビーを楽しむという自覚の元に相手を認め合い、同時に大役を受け持ってくれたレフリーに対して感謝の礼を失わないという基本的なマナーです。ラグビーは physical contact が多く、激しく争う時に、力強い激しさと粗暴とは異なるものであるという認識とそれによる抑制が求められ gentleman ship の高揚が叫ばれるのです。each side に分かれてのゲームは競技時間終了で noside になります。敗者は悪びれない爽やかさが求められます。敗因を責め合うことなく冷静に話し合っって明日からの練習のプラスになるよう分析することが必要です。マナー全体については資料1のRFU発行のパンフレット“the spirit of rugby”^(*)を再読して下さい。分かりやすく説明されています。

「自分で自分をほめたい」というマラソンランナーの言葉が流行語になりました。あなたは自分を good loser と言えますか。近頃 good loser という言葉を全くと言ってよい程聞かなくなったのは社会全体の風潮に影響

されるところが大きいですが RFU の “The Guide for Coaches” の指摘がその一因であるかもしれません。

In the past the reasons for not achieving such desired results, as well as emulating the same efficiency standards as other countries, can, perhaps, be summarised as follows :

- (i) Generally we are too good losers-lack of "will to win".
- (ii) We do not appreciate progress-"continual acceptance of change".
- (iii) We are shy of new ideas-"not done": temporarily appreciated and then lost
- (iv) We therefore become too conventional-leading to an inferiority complex.
- (v) Too little differentiation made between : training; teaching ; coaching.
- (vi) Unit and team skills or techniques practised insufficiently as compared with individual skills.
- (vii) No basic dogma on which we can build sophistication and variety.
- (viii) Lack of intensity of approach.

and, overshadowing all these points, an overall lack of "attitude of mind", gearing everyone involved to attacking play by quality possession based on co-ordinated team understanding/effort.

資料 1 (RFU 発行「The Guide for Coaches」より)

1950～1970 年代にかけて RFU がラグビーの母国の名誉をかけて復活を目指した心情とエネルギーの大きさを感じます。RFU が歴史ある言葉を捨ててしまったわけではありませんし、死語になってしまったものでもありません。一方 good loser を説く指導者に体罰は全く結びつかないものであることは言うまでもありません。good winner という言葉は使われませんが、心掛けとしては当然あってよいものです。大相撲で勝った力士は土俵上でガッツポーズをしないという伝統も大切なマナーとなっています。noside と good loser の 2 つの大切なラグビー用語と精神を good spectator と共に生かしていかなければならないと思います。

最後に資料 2 の playing charter を引用して noside から good loser や amateurism 等ラグビーの traditional sporting qualities について復習することの重要性を指摘しておきます。

英文	和文
<p>Conclusion</p> <p>Rugby is valued as a sport for men and women, boys and girls. It builds teamwork, understanding, co-operation and respect for fellow athletes. Its cornerstones are, as they always have been: the pleasure of participating; the courage and skill which the Game demands; the love of a team sport that enriches the lives of all involved; and the lifelong friendships forged through a shared interest in the Game.</p> <p>It is because of, not despite, Rugby's intensely physical and athletic characteristics that such great camaraderie exists before and after matches. The long standing tradition of players from competing teams enjoying each other's company away from the pitch and in a social context, remains at the very core of the Game.</p> <p>Rugby has fully embraced the professional era, but has retained the ethos and traditions of the recreational Game. In an age in which many traditional sporting qualities are being diluted or even challenged, Rugby is</p>	<p>おわりに</p> <p>ラグビーは、成人の男性にとっても女性にとっても、少年にとっても少女にとっても価値のあるスポーツである。ラグビーは仲間の競技者との間のチームワーク、理解、協力、そして尊敬を作り上げる。その基になるのは、それらがいつでもそうであったように、参加する喜び、ゲームが要求する勇気とスキル、関与するすべての人々の人生を豊かにするチームスポーツへの愛、そしてゲームにおいて共有される興味を通して築かれる生涯の友情である。</p> <p>そのような偉大な友情が試合の前にも後にも存在するのは、ラグビーの持つ激しい身体的・競争的特徴があるからである。競い合うチームのプレーヤーがお互いに楽しむという永きに渡って存在する伝統は、ゲームの中核となる部分として今日も存続している。</p> <p>ラグビーはプロフェッショナルの時代の到来を完全に受け入れるようになったが、リクリエショナルなゲームとしての特質と伝統は残っている。伝統的なスポーツの特質の多くが弱められ、あるいは疑われ</p>

rightly proud of its ability to retain high standards of sportsmanship, ethical behaviour and fair play. It is hoped that this Charter will help reinforce those cherished values.

る時代にあつて、高い水準のスポーツマンシップ、倫理的な行動、そしてフェアプレーを維持する能力をラグビーが有することを、ラグビーは真に誇りに思う。この憲章は、これら大切に守られてきた価値を強めるための一助になることを期すものである。

資料 2 (IRB 発行 競技規則 2013 playing charter より)

good loser は「負けてもよい」という考えにつながっているものではありません。good loser は現在でも死語ではないのです。それから good spectator (よき観客) という言葉はありませんが、“The Art of Refereeing” の Editor’s Note に次のように書かれています。

‘It is hoped that players and spectators as well as referees . . .’

「この本はレフリーと同じようにプレーヤーも観客にも読まれることが望まれる」

皆で正しい形や方法でラグビーが創造され楽しめることを説いています。そのために誤った勝利至上主義に陥ることなくスポーツ楽しむ attitude (姿勢・心構え) が重要なことは言うまでもありません。歴史を学ぶということは歴史即ちどの時代に何があったということを単に知ることではありません。その事実を産んだ時代の状況や風潮も含めてそのイメージを受け取ることです。そしてイメージが発信しているものを理解することを通して現在の正しい理解から better そして best な未来実現に役立てる事です。

2014.03.08
西川 義行

*1: <http://nishikawarugbycolumn.web.fc2.com/column/PDF/20110918-2.pdf>